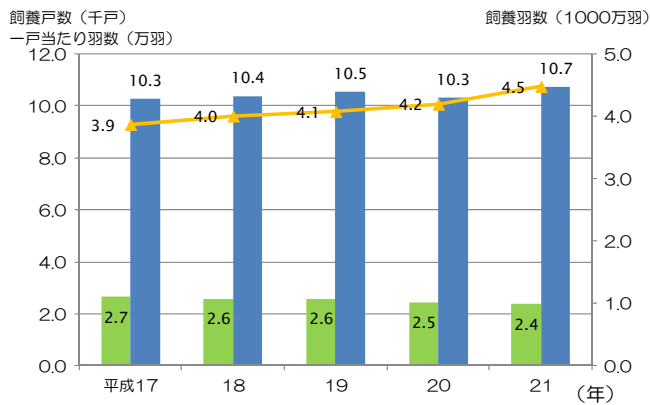


鶏肉

◆飼養動向

ブロイラー飼養羽数は、1億714万羽と前年を4.0%上回る(21年以降のデータは未公表)

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産物流通統計」

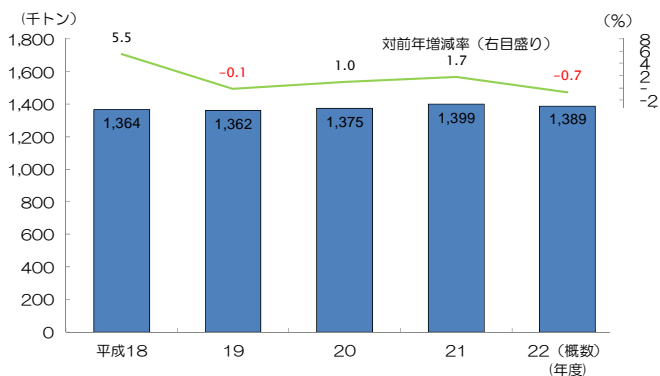
注：数値は各年の2月1日現在、22年以降のデータは未公表

※飼養動向については、農林水産省「畜産物流通統計」の中で公表されていたが、統計業務の見直し等に伴い該当する項目がなくなったことから、22年以降のデータは未公表(図1)。

◆生産

22年度の鶏肉生産量は、138万9千トン(概数)と前年度を0.7%下回る

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食鳥流通統計」

注：骨付き肉ベース

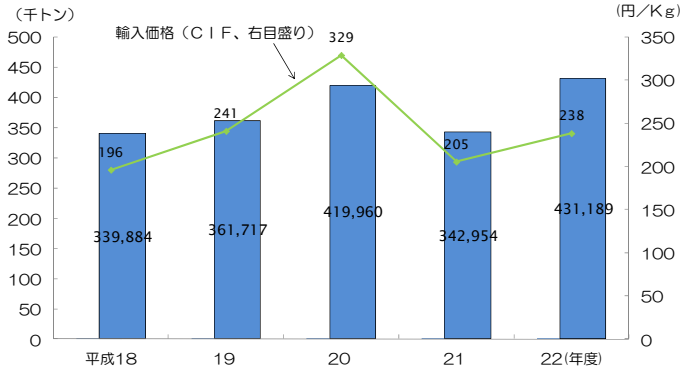
国産鶏肉の需要は、中国産冷凍ギョーザ事件後、国産志向に支えられ需要は高まり卸売価格は上昇した。これに伴い増産意欲も高まり、20年度は137万5千トン(0.9%)、21年度はさらに上回り139万9千トン(1.7%)となった。22年度は暑熱の影響や高病原性鳥インフルエンザの発生等により生産量は減少、輸入量は138万9千トン(▲0.7%)となった(図2)。

◆輸入

22年度の輸入量は、前年度を大幅に上回る、43万1千トン(25.7%)

鶏肉

図3 鶏肉の輸入量

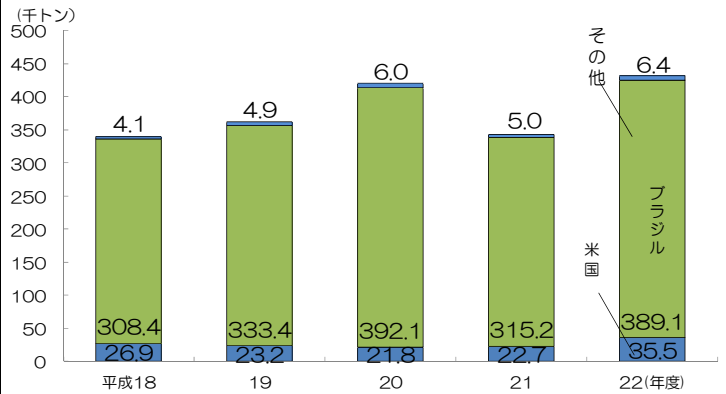


資料：財務省「貿易統計」

注：生鮮・冷蔵品を除く

鶏肉の輸入量は、そのほとんどが冷凍品で、業務、加工向けなどの需要にあった安価で使いやすい製品が供給されてきた。20年度前半にかけては、輸入品に対する安全性の観点から、国産鶏肉卸売価格が前年度を大きく上回って推移、前年度を16.1%上回る42万トンとなった。21年度は、20年度後半からの景気低迷により安価な輸入品が増加、期首在庫を大量に抱えていたため、適正な在庫水準まで抑えられた結果、34万3千トン(▲18.3%)と前年度を大幅に

下回った。22年度は在庫量が適正水準まで下がり、さらに暑熱による国内生産量の減少から国産品の品薄感もあって、輸入量は回復、43万1千トンまで大幅に増加した(図3)。

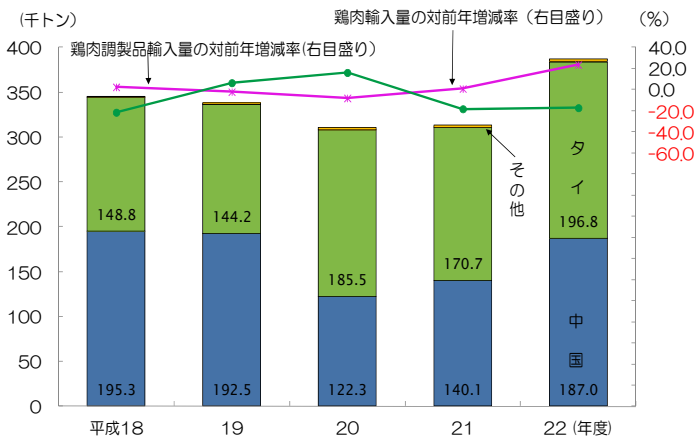


資料：財務省「貿易統計」

輸入先を国別に見ると、ブラジル産が全体の約9割を占め、22年度は90.2%となった。米国からの輸入量は、高病原性鳥インフルエンザ発生により、たびたび輸入停止措置がとられたが、22年度は輸入量全体の8.2%占めるまで回復している(図4)。

鶏肉調製品

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

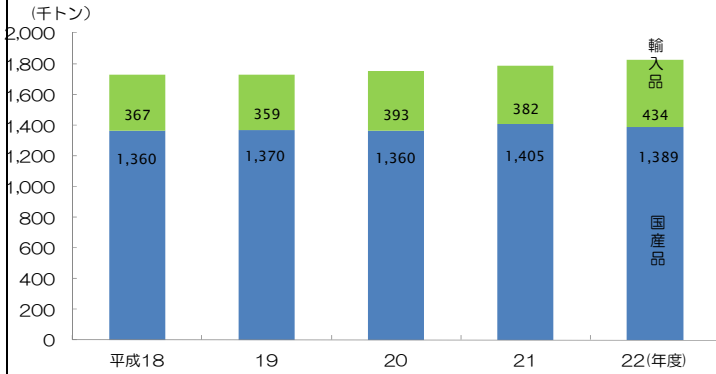
鶏肉調製品(焼き鳥、チキンナゲット、唐揚げ等)輸入量は、安い素材を求める外食・業務用向けとして、中国・タイを中心に輸入されている。20年度は中国産冷凍ギョーザ事件の影響により中国産が減少し、31万トン(▲8.1%)となった。

21年度は景気低迷による低価格志向から前年度を上回る31万3千トン(0.8%)となった。その後中国国内での生産体制が徐々に整備されてきたことを受けて、中国産は14万トン(14.6%)と大幅に増加した。22年度は中国・タイともに輸入量をさらに伸ばし、38万7千トン(23.6%)となった(図5)。

◆消費

22年度の推定出回り量は、前年度を上回る182万3千トン(2.1%)

図6 鶏肉の推定出回り量



資料：農畜産業振興機構調べ、農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」

鶏肉の推定出回り量は、近年、前年を上回って推移し、このうち、22年度は182万3千トン(2.1%)となった(図6)。

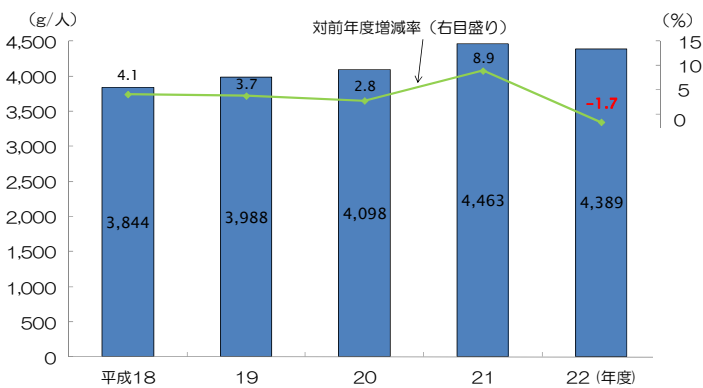
国産品は、消費者の国産志向の高まりなどからおおむね増加傾向で推移していたが、22年度は期末在庫の品薄と国内生産量の減少により、138万9千トン(▲1.1%)となった。

一方、輸入品は海外からの鶏肉調製品との競合により、減少傾向で推移していたが、輸入調製品に対する不信感から、20年度は輸入量を大幅に増やし、39万3千トン(9.3%)と前年を上回った。在庫過剰により輸入量が抑えられた21年度は38万2千トン(▲2.8%)、22年度は景気低迷により安価な輸入量が増加し43万4千トン(13.8%)となった。

◆家計消費

22年度の家計消費量は7年ぶりに前年度を下回る4,389グラム(▲1.7%)(全国1人当たり)

図7 鶏肉の家計消費量(1人当たり)



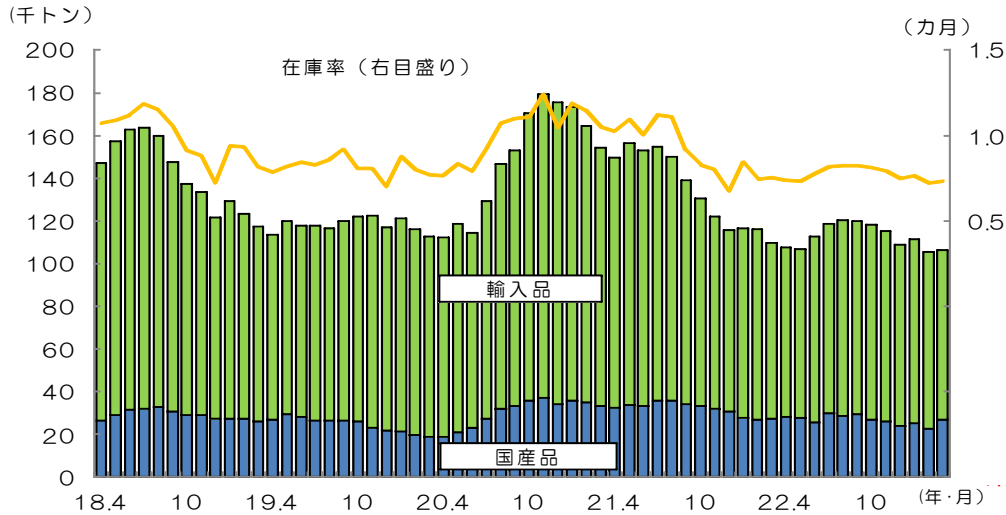
資料：総務省「家計調査報告」

鶏肉の家計消費量は、景気の低迷を受け、安価な鶏肉は堅調に推移しており、20年度は4,098グラム(2.8%)、21年度についても、むね肉が安価だったこともあり、4,463グラム(8.9%)と前年を上回って推移した。22年度は消費者の節約疲れや、他の食肉の価格低下による値ごろ感から消費量は伸び、鶏肉の消費量は相対的に下回り4,389グラム(▲1.7%)と前年度を下回った(図7)。

◆在庫

22年度期末在庫は、前年度を下回る10万6千トン(▲3.0%)

図8 鶏肉の推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注：在庫率=在庫量/推定出回り量

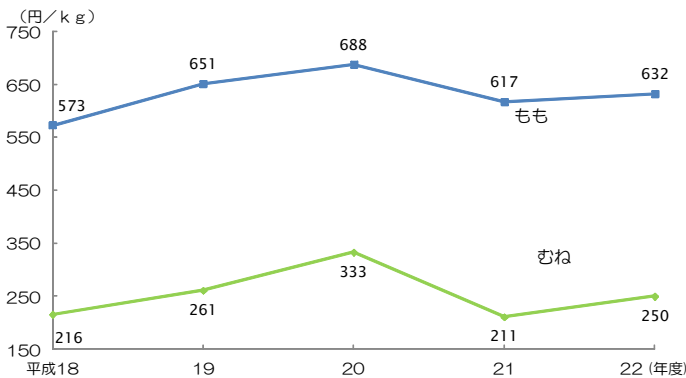
鶏肉の推定期末在庫量は、輸入量の変動を大きく反映している。20年度は、国産品の品薄感からブラジルからの輸入が急増、在庫が積み増され前年度を大幅に上回り15万トン(37.0%)。21年度は大量の期首在庫を受けて、輸入量が

抑えられたことから、11万トン(▲28.9%)となった。22年度は夏の猛暑や高病原性鳥インフルエンザなどによる国産品が減少したものの、輸入量は前年を上回ったことから、全体としては11万トン(▲3.0%)となった。(図8)。

◆卸売価格

22年度はもも肉(▲10.3%)、むね肉(▲36.6%)、ともに下落

図9 国産鶏肉の卸売価格



資料：農林水産省「食鳥市況情報」、「ブロイラー卸売価格」

注：消費税を含む。

国産鶏肉の卸売価格(ブロイラー卸売価格・東京)のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、20年度は年度前半の国産回帰による高値が影響し688円(5.8%)となった。その後の景気低迷による低価格志向により、20年度後半から徐々に低下、21年度前半までの価格安が影響し、年度平均では617円(▲10.3%)、22年度は632円(2.4%)と推移した。

一方、主に加工・外食用途の「むね肉」は、輸入加工品に対する食の安全性への不安感から、国産品を国内加工へシフトする動きが出たことから需要が高まった。20年度は高値

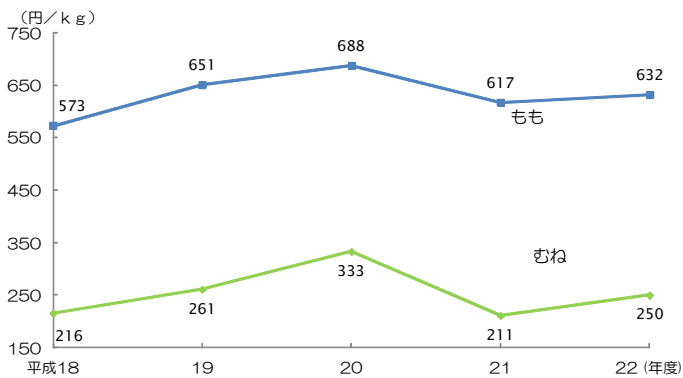
で推移し、前年度を大幅に上回った。21年度は輸入品在庫が過剰となり、輸入品と競合するむね肉価格は低下、同211円(▲36.6%)と大幅に前年を下回った。22年度は国内在

庫量の切り崩しが進み、価格は上昇に転じたことから、前年を上回る同250円(▲18.3%)となった(図9)。

◆小売価格

22年度の小売価格(もも肉・東京)は、前年度を1.6%上回る

図10 鶏肉の小売価格(もも肉・東京)



資料：総務省「小売物価統計調査報告」

鶏肉の小売価格(もも・東京)は、国産志向の影響もあり20年度は100グラムあたり135円(6.7%)と前年度を上回った。しかし21年度は過剰な在庫量と、20年度後半から続いた価格下落が大きく反映し、同128円(▲4.8%)となった。22年度は生産量が減少したことから価格は上昇、同130円(1.6%)と前年度を上回った(図10)。